

刀相州住綱廣(三代)

相模 文祿(一五九二)

「相州住綱廣」「綱廣」

「相模国住人於鶴岡綱廣造之」

「津輕主為信相州綱廣呼下作之三百腰之内」

(慶長十一年)

山村 宗右衛門。

鎌倉 扇ヶ谷 住。

寶永十五年(一六三八)二月二十七日没

九十一歳。

法名 玉祐。

平成二十五年七月十九日

刃長 71.0cm (二尺三寸四分三厘)

先重 0.44cm (0.39cm)



茎元中 2.90cm

鎬造、庵棟尋常、鎬中は狭めで鎬高は尋常、重ねは尋常で身中の廣は造込みとなり、先の身中も廣く切先は中切先が延びてフクラは枯れる。反りは中間反りにやや先反りを加えた。新古摺の打刀姿で姿に強味があり堂々として持重りがする。

地鉄は板目に全交じり、手元はやや約升中程から上は板目が肌立ち、地帯がよくついて板目の肌にあつて地帯が沈む。中程から上は棟を煉ま、裏の物打辺りの鎬地は板目の肌に匂がからんでゐる。

刃文は湾れに互の目で、刃を交じえ、肌からんで砂流しが交じる。刃中は足が入り、匂口は締めて沈む。物打辺りは燂頭に小沸がつく。

帽子、横手の辺りは少とく乱れ、その先は肌からんで砂流しが交じり、先は小丸に拂けて返る。

茎は生ふ、長寸で刃方を張らせて先を細め、茎尻はやや浅い、刃上り栗尻、刃角は、 棟角小角 

鑑は切、目釘元は一旧、銘は鎬筋にかぶせて切る。

沈んだ匂口とよく練れた鉄、渋く落ちついた雰囲気、往時を偲ばせる。此、刃のすこぶる健全な優作。

鑑定刀

反り 2.03cm (六分七厘)

切先長 4.24cm

茎元中 1.10cm

元中 3.29cm (3.11cm)

先中 2.25cm (2.13cm)

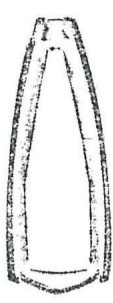
元重 0.77cm (0.72cm)

茎長 19.4cm (19.6cm)

茎反り 0.4cm

茎元重 0.79cm (0.76cm)

茎先重 0.55cm (0.54cm)



相州住綱廣

刀備州[備]住貞次作

享徳二年二月日(一四五五)

備後 享徳

「備州[備]住貞次」

鞆三原という、鞆鍛冶はこのころからみうけられる。

平成二十八年三月十八日

鑑定刀

刃長 63.6cm (二尺一寸)	反り 1.57cm (五分三厘)	元中 2.77cm (二.65cm)	先中 1.28cm (一.68cm)	元重 0.69cm (0.51cm)
先重 0.47cm (0.35cm)	切先長 2.90cm	茎長 14.5cm (14.9cm)	茎反り 0.1cm	茎元中 2.42cm
茎先中 1.65cm	茎元重 0.74cm (0.61cm)	茎先重 0.45cm (0.40cm)		

鍋造、庵棟尋常、鍋中は広めで鍋は高く、棟の重ねは薄く身中の狭めの造込みとなり、元中に比較して先中を落とし切先は中切先でフクラは枯れ、反りは中間反りに腰反りを加えて踏張りがつき先反りがついている。

地鉄は板目に杓目、板目が流れて肌立ち、細かな地沸が厚くつき、肌に添って地景が鮮やかに表われている。

よく練れた見事な鉄で地色は黒味を帯びて明るい。

足・葉よく入り細かな金助・砂流しを交じえる。刃中は白く小沸がよくつく。

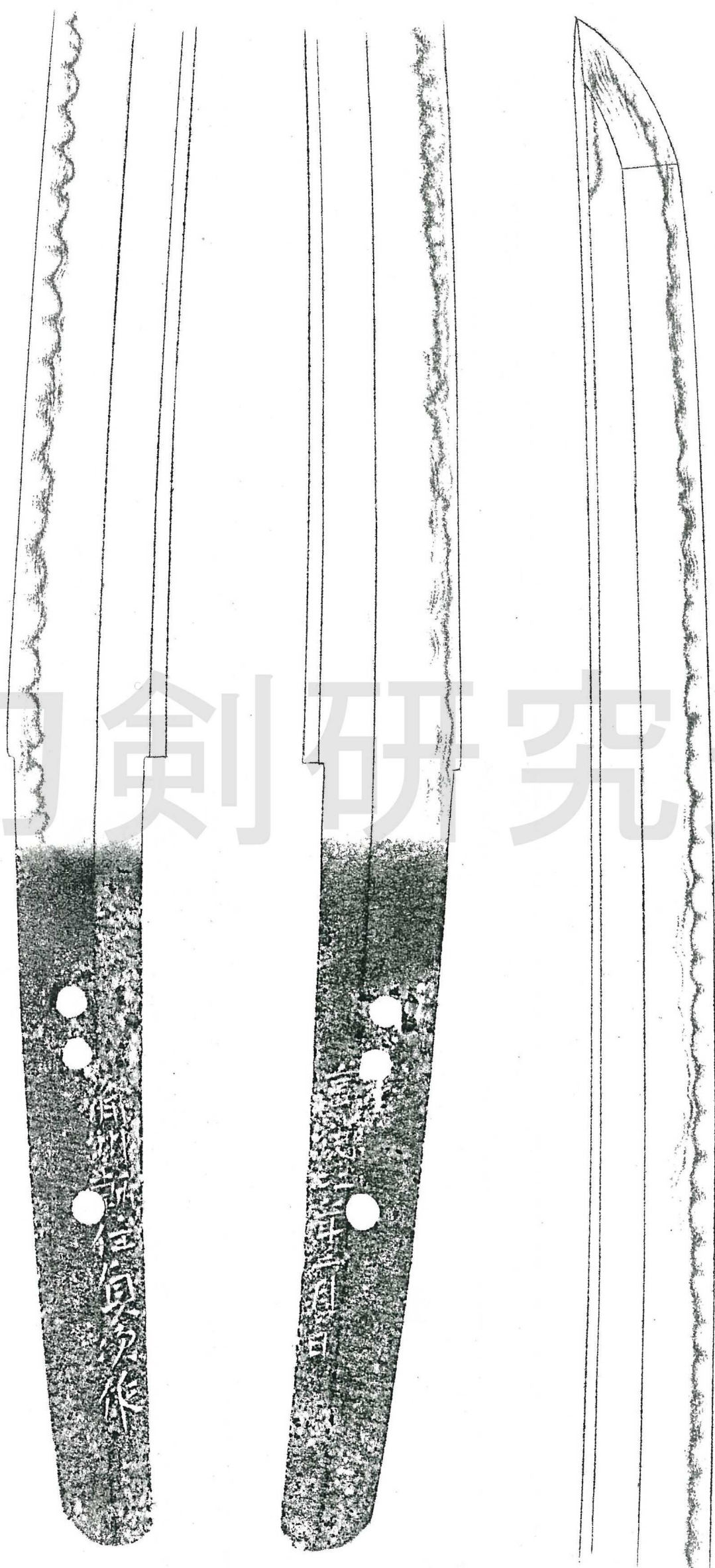
帽子 直ぐに小互の目を交じえて先は小丸で掃げ、返りの焼中は広めで長く焼く(虎の尾返り)。

茎はおよそ2cm程区を送る。

鍋中は尋常で鍋は高く、元中と先中の差は少なく先は刃入り栗尻、刃角口目棟角小肉(上)三三三

鑢は勝手下り、目釘元は三、銘は長銘を表裏に切る。地刃健全、細身の姿が美しく練れた地鉄が力強い。

鍋は高く、流れた肌、帽子の返りに三原の特徴がよく表われている。



刀劍研究

刀 相模守藤原泰幸 (三代)

尾張 質文(一六六一)

「相模守藤原泰幸」

名古屋城下長島町住。

初代は「能登守」で本國美濃

尾張實永(一六二四)。

三代は「能登守」で

尾張元祿(一六八八)。

平成二十八年三月十八日

鑑定刀

刃長 63.6cm (二尺一寸)

反り 1.73cm (五分七厘)

元中 3.51cm (3.27cm)

先中 2.40cm (2.20cm)

元重 0.76cm (0.71cm)

先重 0.48cm (0.46cm)

切先長 3.68cm

莖長 16.7cm (17.2cm)

莖反り わずか

莖元中 3.00cm

莖重 1.60cm

莖元重 0.80cm (0.77cm)

莖先重 0.46cm (0.45cm)

鎗造、庵棟高く、鎗中と鎗高は尋常、重ねは厚く身中の広、造込みなり先中も広く切先は中切先でフフらは張る。

反りは中間反りが頃合いで先反りをやや加えて踏張りのついた。天和・貞子の刀姿となる。

地鉄は小板目かよく約んで微塵の地沸がついて明るい。

刃文は互の目に丁字、焼出しは低く小互の目に小丁字、その上は焼中を広めて互の目と丁字も大きく乱れ、所々独特の細くて焼頭のフツ切れをうば丁字を焼き、焼焼を交じえる。刃中は足が入り、物打辺りは金筋・砂流しを交じえる。

匂口は締りがげんに明るく冴える。

帽子 長は直ぐに小互の目を交しえ、裏は浅く汚れて、先は丸く返る。

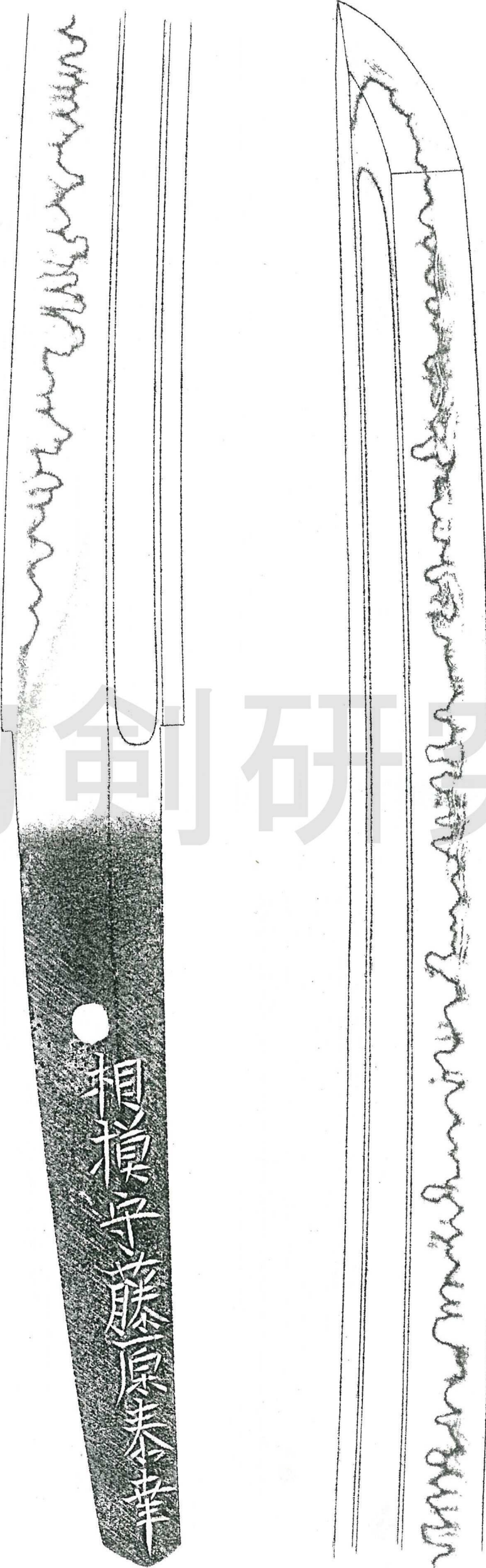
彫刻 表裏に丸止めの棒樋を掻く。

莖は生ぶ、鎗中・鎗高は尋常で重ねは厚く、刃方を張らせかげんに先を細め莖先はハム形、

刃角 〇 棟角小内 〇 鏡は化粧鏡 磨出しは切で下は筋違、

目釘元は大きめに一、銘は鎗筋にかぶせて長銘をやや太整で堂々と力強く切る。

地・刃健全でその出来も良い。



相模守藤原泰幸

脇差 堀内源俊卿作

嘉永二年二月日(一八四九)

本脇差の造込斗・姿・地鉄・刃文は

清磨の作風と一致するところが

多い。さらに天保十四年二月と八月の作品も清磨の作風に近く、此らは偶然とは考えにくく、俊卿は清磨の弟子、もしくはその一門に近い間から考へることが可能なる。天保十五年「於長門国」と切った作が現存するといわれ、俊卿の作は山口県下で散見され、山口県の登録証が付帯している。清磨の長門滞在時に師事したものの、江戸以来の弟子が資料は今のところ発見されなかつたが、清磨に師事した可能性は高い。

平成二十八年三月十八日

鑑定刀

刃長 46.0cm (一尺五寸一分八厘)

反り 1.24cm (四分二厘)

元中 3.17cm (三〇九)

元重 0.67cm (〇.36cm)

先重 0.45cm

莖長 13.2cm (13.7cm)

莖反り わすか

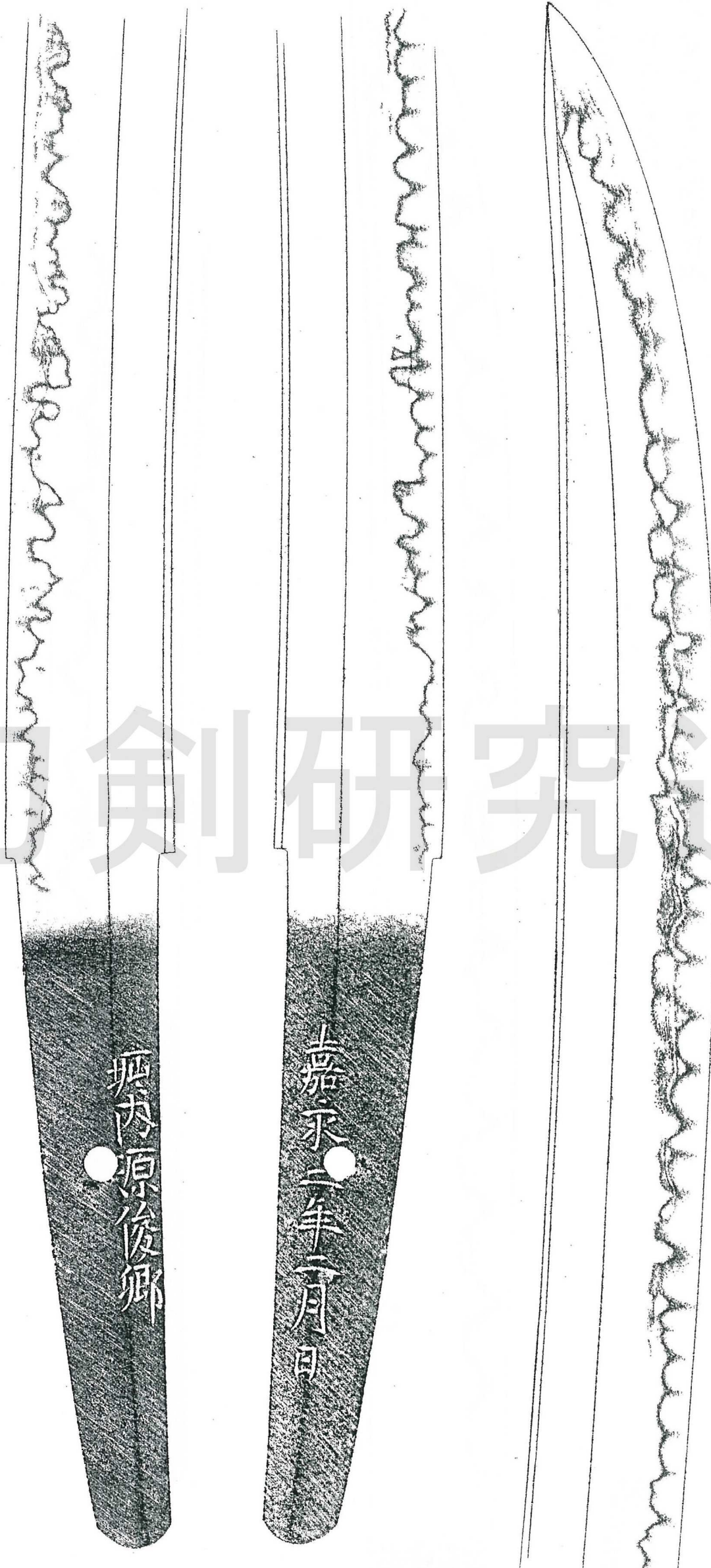
莖元中 2.82cm

莖帯 1.50cm

莖元重 0.64cm (0.42cm)

莖先重 0.37cm (0.27cm)

莖浦造、庵棟低く、鍋中はやや広く鍋は心持ち高めで棟の重ねは薄く、やや菱形に近い造込斗となり、身中は広くフクラは極端に枯れ、先反りのついたすずしい姿となる。地鉄は板目、刃よりは板目が流れて小奎を交じえ、細かな地沸が厚くつぎや肌立って地景は頻りに交じる。刃文は互の目に丁字を交じえ、刃中は長い、足と葉がよく入り、金筋・砂流しを交じえ、沸・匂が深めで匂口は明るく冴えて小沸がつく。帽子は乱れて先は俯きかげんにやや掃けて短く返る。莖は生ぶ、鍋中は尋常で鍋はやや高く重ねは薄く、先中を頃合いに落とし先は深めの目釘穴はやや下方に一ツ、銘表は作者を鍋地に切り、裏は制作年紀を鍋筋にかぶせて切る。



堀内源俊卿

嘉永二年二月日

短刀 義助 (四代)

駿河 天正(一五七三)

「義助」駿州住義助

「甲府城内義助作」

「駿州島田住義助作」

島田。

五条清兵衛。

備前より来住した家俊、家次父子に

備前伝を学ぶと伝えてゐる。

○初代は康正(一四五五)で今川義忠が

「義」の字を給り、義助と名乗ると

伝える(島田鍛冶の祖)。

○二代は明応(一四九三)で何伝でもこぼす。

○三代は大永(一五二二)で二代同様何伝

でもこぼし、作品も升る。

○五代は慶長(一五九六)。

平成二十八年三月十八日

刃長 29.7cm (九寸八分)

茎長 10.09cm

茎先重 0.61cm

鑑定刀

反り 0.48cm (一分六厘)

茎反り 無し

茎先重 0.33cm

元中 2.75cm (2.65cm)

茎中 0.51cm

元重 0.58cm

茎先重 0.34cm

平造、三ツ棟 棟筋の中は狭く庵は尋常、重ねは薄めで身中はやや広めの造込みなり、フクラは枯れて先反りがつく。地鉄は板目、所々歪目を交じえ、肌立ちかげんに微塵の地沸がつく。

刃文は互の目、頭の丸い刃に所々角張った刃を交じえ、

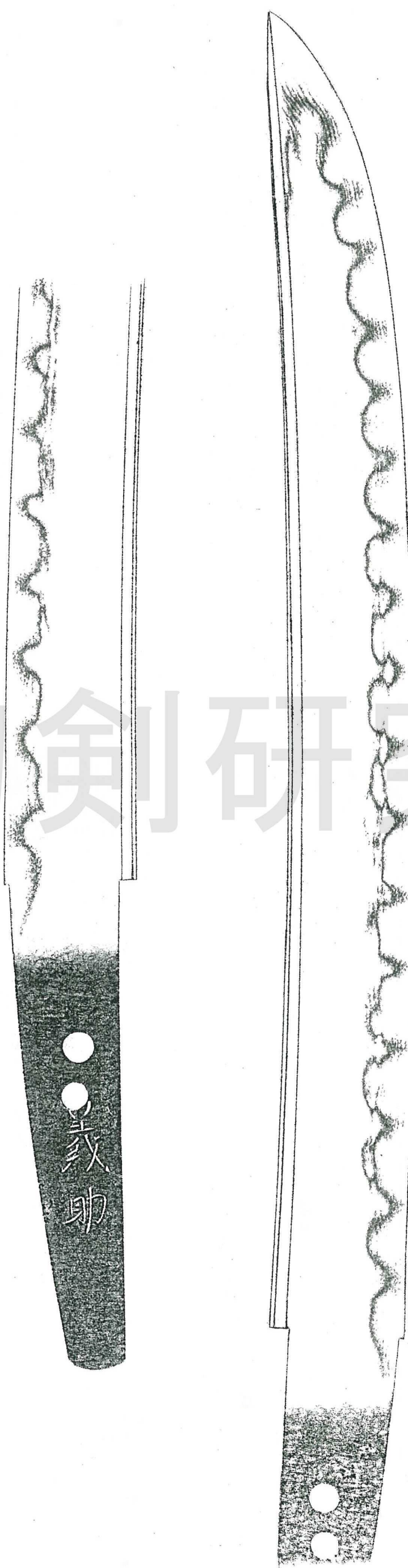
を交じえる。匂口は明るく冴える。

帽子は乱れて直ぐに小丸で長めに返る。

差は生ふ、身中は尋常、重ねは薄めで先の重ねを落とす、刃方をやや張らせかげんに先を細め、先は浅く刃上り栗尻、刃角小内、棟丸、鑢は勝手下り、目釘穴は二、銘は茎の中程に 整の走りの速ニ字銘を

流暢に切る。

地・刃健全、表裏の刃がよく揃い、匂口は明るく冴える。



刀剣研究連会